

WEP

ウェブ俳句通信

VOL. 94

俳句通信

特別作品25句 ●
鈴木貞雄「父の淡海」

特集 ● 〈草田男の現在・現在の草田男〉

- 高 朋子 「草田男の『ものを視る眼』」
矢須恵由 「草田男俳句に学ぶこと——思想句と字余り——」
小川雪魚 「『草田男に学ぶ』ということ」
遠藤由樹子 「草田男という印象」
角谷昌子 「『生きる』ための俳句」
筑紫智井 「中村草田男の現代性・社会性」

【西池冬扇50句】
「虫だった頃」

【精説作家30句】
柳生正名「柚子坊」
太田うさぎ「青壺」

【実力作家7人競詠20句】

- 佐藤麻績「坊津」
中村和弘「激流」
鈴木太郎「大文字の火」
草深昌子「磐石」
染谷秀雄「近江の秋」
寺井谷子「白粥」
柴田佐知子「月光」

● 作品 ●

伊藤敬子・須原和男・小路智壽子・松尾隆信・上田日美子・
加藤瑠璃子・和田順子・檜 紀代・米山光郎・中村正幸・
森野 稔・村上喜代子・滝 見彦・山崎十生・佐谷 清・
松岡ひでたか・広瀬恵美子・小牧さつき・大久保道子・
木内宗雄・柏木とよ太・森井美知代・中村洋子・川上昌子・
工藤 進・大石雄鬼・押野 裕 はか



靱焼いて蘆を焦がせる浦ひとつ

小原秋桜子

靱殻焼き

晩秋の釣りは夕刻に好地合いが来る。ひとり釣りに行くときは薄闇が広がる時刻まで気兼ねなくたづぷり竿を振る。

稲り道は朝とは違い、直ぐに高速道路には入らず、車の窓を開けて幾つかの集落の庭先や田んぼ路を縫う様にドライヴするのが実に楽しい。

刈り取った田んぼのあちこちに稲藁があり、靱殻を焼く煙が車内に入ってきて来る。多少煙いが悪くない。三十分も走ると急に冷え込んで来て、窓を閉めヘッドライトを点けると薄紫の霧の様な視界が広がる。

現在は稲を機械で刈り入れるため少なくなったが、靱殻の焼製は優れた肥料で、古くから何処の田んぼでも作られて来たそうである。しかし、煙が迷惑だとして規制されている所もあるという。貴毎夕濡って来た蘆や風呂炊きの煙りと変わりないのだが。

絵・文 杉原武弘

特集

〈草田男の現在・現在の草田男〉

俳誌「萬緑」が来年3月に終刊になるといい、

俳句の世界はひとつの節目を迎えているのかもしれない。
これを機に中村草田男をどのように読んできたか、

現在、草田男をどのように評価しているか、などについて
6人の方にお書きいただきました。

特別作品25句

父の淡海

鈴木貞雄

近江路や梅花藻そよぐ水澄みて

みづうみの光溢るる貝割菜

堅田千軒ありしは昔魯萌ゆ

そのかみは湖族の郷の野紺菊

剥きたての干柿しろし比叡風

道新田義貞夫人・勾当内侍の墓の辺に夫人ぶにんの墓や秋の風

西池冬扇 50句

虫だった頃

空を切る新型電気蠅叩き
大毛虫またも落ちたる蓮の鉢
緑陰の爪切りニッパ良く切れる
ぶつかってぱつと分かれて目高にて
ひんがしへ北へ南へホトトギス
大空にコホンと吹きしはったい粉
山賊の背中一列灸二列

にしつけ・とうせん
昭和19年(1944) 4月20日・大阪に生まれ東京に育つ
45年「ひまわり俳句会」高井比杜に師事
平成20年「ひまわり俳句会」主宰継承
句集に「凝結」「從軍」など
評論集に「俳句の魔術」「俳句表出論の試み」など

超結社句会 新12番勝負



前列右から 遠藤氏、星野氏、飯田氏
後列右から 大石氏、藤本氏、松岡氏

ゲスト 飯田 晴・遠藤千鶴羽

大石香代子・松岡隆子

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集長 超結社句会第35回目です。ゲストは「雲」主宰の飯田晴さん。「なんじや」同人の遠藤千鶴羽さん。「鷹」同人の大石香代子さん。「朝」編集長の松岡隆子さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん。「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 今日はずいぶん割れました。だれも探っていない句は5句だけ。あとで、この5句についてもやりましょうか。初めは、まあ、いつもどおり、点の入った句からやりましょう。高点句は4点でした。

無為無策南京豆を喰みこぼし

勝(香美)

香代子 いろいろな状況で「無為無策」はあると思うんです。何か切実に迫られていることがあって、自然に「南京豆」に手が出てしまうというところにリアリティがあるなど。

千鶴羽 「南京豆」という言葉に面白みがあって、「無為無策」の自分を客観的に見ているような感じが面白かったです。美和子 まず、「無為無策」という成語をうまく上五にもってきて、あら、なんだろう、と思わせて、「南京豆を喰みこ